

# 正行

シテ 楠木正行

トモ 正行の臣

ワキ 吉野の僧兵

ワキツレ 同

狂言 正行従者

所 大和吉野

時 春

シテ「これは楠正行にて候。扱も此度後醍醐天皇崩御な  
らせ給ふにより。卿相雲客散々になり給はん志見  
えて候。天皇の御遺勅には。第七の宮を御位に即  
け給ひ。朝敵追伐の。御本意をとぐべしとの。御  
遺勅にて。程なく崩御ならせ給ひ候。さる間七の  
宮御位に即かせ給ふべき其間。若し逆臣の寄せ来  
る事もあるべきかと存じ候程に。此三吉野に城を  
かまへ。皇居を守護し申さばやと存じ候。如何に

誰かある。

狂言「シカぐ。」

シテ「急ぎ御所に櫓をあげ候へ。」

狂言「シカぐ。」

シテ「何と当山よりの文と申すか。やがて開いて見うず  
るにて候。抑も当山と申すは。王城鎮護の靈地に  
て候。王法を仰ぎ天下第一の御祈禱所なり。然る  
に此山に於て。落花狼藉心得ず候。此事留り給は

ずば。当山の面々押し上せ申すべきものなり。言語道断。是は一大事にて候。

狂言「シカぐ。」

シテ「実にく汝が申す如く。さらば歌にて御返事申さうずるにてあるぞ。急いで此文を渡し候へ。

狂言「シカぐ。」

シテ「たとひ面々寄せ来る共。何程の事のあるべきぞと。

地「太刀おつ取つて立ちあがり。く。時しも春の花

ざかり。散らさでなどかあるべきと。木陰に立ちてひそかによする敵を待ち給ふ。く。

ワキ立衆

「よし野川。花の白浪声たてゝ。鬨を作つて騒ぎけり。

地

「正行これを三吉野のく。山辺に咲ける桜花。雪かとのみにあやまち給ふなど。切つてかゝり。蜘蛛手十文字。しのぎを削り。戦ひければ。さしもの兵斬り立てられて大勢ばつとぞ引きたりけ

る。

ワキ「のうく正行。以前の詠歌の心を感じ。和睦をなさんと  
思ひしかども。正行が武勇を見ん為なり。此山の神慮も照覧あれ。面々いよく和睦ぞと。太刀長刀をなげ捨て。」

ワキ立衆「各々座敷に直りつゝ。正成笠置へ参られし。謂を委しく語り給へ。」

シテ「さあらば語つて聞せ申し候べし。そもく北条の時政九代に至り。高時と云へる逆臣あり。其身は上下の礼を乱し。万民更に安からず。」

シテサシ「然れば後醍醐天皇。凶徒を静めん其為に。」

地「都を忍び御出あり。笠置の山に入給ひ。御堂に御座を構へしに。或夜不思議の御霊夢あり。」

クセ「びんづら結へる天童の。二人来つて申す様。此常盤木の南に座せる此枝の其下に。暫く御座をなし給ひ。敵を亡しおはしませと。云ひ捨て雲井に上

れば夢も覚め給ふ。

シテ「帝夢中の有様を。」

地「文字にうつさせおはしまし。当寺の衆徒を召し出し。楠と云へる武士。若しもありやと宣へば。金剛山の麓に。さる弓執の候と。奏し申せば勅使立つ。頓て正成参内し。治めし国の例をば。引くや親子の我も又。敵を亡し君が代を。幾千代迄とあふがん。

ワキ「委しく御物語り候物かな。此面々も御味方申さうずるにて候。これと申すも我君の。御代万歳の初なれば。和歌を詠じて舞を舞ひ。急ぎ酒宴をなし給へと。」

シテ「衆徒中共に。喜の。」

地「心嬉しき酒宴かな。」

ワキ「如何に正行一さし御舞ひ候へ。」

地「心うれしき酒宴かな。」

地「かくて酒宴も時過ぎてく。夕陽西に傾きければ。  
各々用意をなさんとて。座敷を立てば。正行も喜  
びげに此君の御聖徳。久しき春に逢ふ事も。思へ  
ばこれも敷島のく。和歌の道こそ目出たけれ。」

底本・国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『四流対照 謡曲二百番 下巻』芳賀矢一訂